

From JPMA

創薬イノベーションへのチャレンジ



日本製薬工業協会
会長 中山 譲治

現在、本格的な高齢・人口減少社会を迎え、財政の健全化や社会保障の持続性への不安等、未来を悲観的に捉える傾向が見受けられます。医療においてもコストの側面ばかりが目立され、患者さんや社会が得る価値や、リスクを負って創薬イノベーションに挑戦した成果が相応の評価を受けていない状況にあります。しかし、私はイノベーションには社会を変革し、明るい未来をもたらす力があると信じています。これからも創薬イノベーションを通じて健康寿命を延伸し、人生100年時代に向けてさらなる貢献を果たしてまいります。その実現にはイノベーションが「生み出される仕組みづくり」とイノベーションが「適切に評価される仕組みづくり」の双方が必要となります。

「生み出される仕組みづくり」のために、製薬協は2016年1月に製薬協 産業ビジョン 2025「世界に届ける創薬イノベーション」を策定し、「先進創薬で次世代医療を牽引する」ことを掲げました。戦略の一つであるリアルワールドデータやAIを活用した創薬プラットフォームの構築を実現するためには、次世代医療のインフラともいえるべき健康医療分野のデータベースの構築が必須です。

一方、「適切に評価される仕組み」とは、革新的な医薬品がもたらす多面的な価値を価格に反映するメカニズム（我が国では薬価制度）のことです。医薬品がもたらす多面的な価値は、大きく3点に分類できると思います。

1点目は、健康アウトカムを超えて社会・経済の発展に貢献する価値です。医薬品は直接的には患者さんを治療しQOLを向上させますが、回復した患者さんや加齢の影響を軽減できた高齢者が働き手として社会に復帰することは経済活動を高め、また、支えられる側から支える側に転換することは社会保障制度の持続性の向上に寄与します。

2点目は、新たな産業プラットフォームの構築により日本の次世代の成長力を生み出す価値です。現在、モダリティが多様化し、抗体医薬やペプチド、核酸医薬に加え、ゲノム医療の発展やiPS細胞の誕生により遺伝子治療や再生医療に広がりました。これにより、たとえば細胞培養1つをとっても、装置・培地の供給や工程別のサービス提供等さまざまな周辺産業が伸張し、製薬企業を中心とした新しい産業プラットフォームが構築され始めています。ライフサイエンスは日本が強みをもつ分野であり、それにさらに付加価値のある技術を蓄積して日本の次世代の成長産業として発展させる価値は大きいと思います。また、ライフサイエンス分野から生まれた新技術はほかの分野にも応用される可能性が高く、より広い産業の活性化が見込めると思います。

3点目は、ライフサイエンス競争力の強化がもたらす価値です。現在、日本の科学技術力の低下を危惧する声も聞かれますが、iPS細胞のような画期的なブレイクスルーが起きれば、次の先進科学・ライフサイエンスの進歩が呼び起こされます。これにより産官学連携の促進、研究費の充実、国民の科学技術への関心が喚起される等、次のイノベーションの創出基盤が醸成されます。

イノベーションには、新しい扉を開け、次元の異なる未来に導いてくれる可能性が大いにあります。製薬協は、ライフサイエンス分野のイノベーションの推進を日本の成長戦略の要に位置付け、新薬の創出からその成果の評価に至るまでを一連のサイクルとして捉えた科学技術振興策を推進していくことの重要性をあらゆるステークホルダーに訴えていくとともに、われわれ一人ひとりも気概をもって創薬イノベーションにチャレンジしてまいります。

(新聞社への寄稿より)

日本製薬工業協会(製薬協) Japan Pharmaceutical Manufacturers Association (JPMA)

製薬協は、病院、診療所などの医療機関で使われる医療用医薬品の研究・開発を通じて世界の人々の健康と福祉の向上に貢献することをめざす、研究開発志向型の製薬会社が加盟する団体で、1968年に設立されました。

製薬協は、「患者参加型の医療の実現」に向けて、医薬品に対する理解を深めていただくための活動、ならびに製薬産業の健全な発展のための政策提言などをおこなっています。

製薬協は、国際製薬団体連合会(IFPMA)の加盟団体として世界の医療・医薬に関わる諸問題に対応し、各団体と連携を図りながら、グローバルな活動を展開しています。

新薬の開発を通じて社会への貢献をめざす 日本製薬工業協会